



雨の図書館で、司書さんに

～ 静かな場所で、溶けていく～

雨の図書館で、司書さんに【体験 版】

蜜夜文庫

く 静かな場所で、溶けていくく

蜜夜文庫【体験版】

...

第二話 雨と、本と、

雨の音は、図書館をより静かにする。

逆説のようだけれど、萌はそう思っている。窓の外でざあざあ降り続ける雨が、外の世界との境界線をはっきりさせる。ここは別の場所だと、音が語りかけてくる。本棚の間を流れる冷えた空気、かすかなインクと紙の匂い、誰かがそつとページをめくる気配。そういうものがいつそう濃くなって、萌はこの天気の日がひそかに好きだった。

六月の土曜日。梅雨のさなか。

カウンターに座って受け入れ作業を続けながら、萌は窓の外に目をやった。傘を差した人々がせわしく歩いている。図書館の前の小道には水たまりができていて、子どもの長靴がその中に飛び込んでいく。

静かな場所で、萌は今日も働いている。

*

午後二時を過ぎたころ、返却ボックスの中身が増えてきた。萌は立ち上がり、木の蓋を開けて本を取り出す。重さが手のひらに馴染む。この感触が好きだ、と毎回思う。誰かが読んで、また戻ってきた本。手垢がついて、少しでも角が折れて、それでも内側には変わらず言葉が並んでいる。

一冊ずつバーコードをスキャンしながら、萌は自動的に表紙を確認していく。

桐野夏生。山田詠美。川上弘美。

読んだことのあるものも、ないものも混じっている。川上弘美の文庫本を手にとったとき、ふと中を開きたくなった。もちろん仕事なので開かないけれど、指先でそつと背表紙をなでた。

次の本を取り出したとき、萌は一瞬止まった。

クロード・シモン、『フランドルへの道』。

翻訳書だった。厚い。文庫ではなくハードカバーで、古い図書館の蔵書だと一目でわかる。貸出カードの時代の名残で背表紙に細い番号シールが貼つてある。バーコードをスキャンすると、貸出者の番号が画面に出た。

その番号を見て、萌の頭の中に自然と顔が浮かんだ。

藤原さん。

毎週土曜に来る人。

*

彼がいつから常連になったのか、正確には覚えていない。いつのまにかそこにいた、という感じで、気づいたら萌の中に「土曜日の人」として定着していた。

三十代半ばくらい。背が高くて、いつも少し猫背で、本棚の前で立ったまま読み始めてしまうのが癖らしかった。服装は地味で、でもどこか選ばれた地味さがある。グレーのシャツとか、ネイビーのジャケットとか。いつも本を五冊か六冊借りていつて、二週間後にまとめて返しに来る。

話しかけてきたことはほとんどなかった。

受け取りのとき、「お願いします」と言う。返却のとき、「ありがとうございます」と言う。それだけだった。でも、その言い方がどこか丁寧で、萌はそれとなく気にしていた。雑でもなく、過剰でもなく、ちょうど必要なぶんだけの言葉を使う人、という印象。

今日も来るだろうか。

そんなことを考えながらスキャン作業を続けていると、入口のほうで傘を閉じる音がした。

*

振り返らなくてもわかった、というのは言い過ぎかもしれない。でも振り返ったとき、そこにいたのは藤原さんだった。

ビニール傘ではなかった。紺色の布の傘で、傘立てに差しながら雫を払っている。濡れた肩。少し乱れた髪。それでも落ち着いた様子で、ゆっくり歩いてくる。

カウンターの前に立ったとき、彼は片手に本の束を持っていた。

「返却です」

低い声。いつもの、それだけの言葉。

「ありがとうございます、お預かりします」

萌は立ち上がって手を差し出した。彼が本を渡してくる。五冊。重さが両手に乗った。

一冊ずつ受け取りながら表紙を確認していく。パスカル・キニヤール、ホセ・サラマゴ、アンナ・カヴァン。どれも一般的な棚ではなく、文学コーナーの奥のほうにある本たちだ。普段はあまり動かない本たち。

萌がバーコードリーダーを走らせていると、

「あの」

と彼が言った。

珍しかった。それ以上の言葉を続けることは、ほとんどなかったから。

萌は手を止めずに顔を上げた。

「クロード・シモンを借りたと思うんですが、返した記憶があつて、でも手元がないので」

「はい、先ほど返却ボックスに入っていました」

萌はカウンターの下に置いてあつた『フランドルへの道』を取り出した。彼の目が少し動いた。

「ああ、よかった」

短い安堵。でも本当に安堵している、ということが声からわかった。

「大事な本でしたか」

そう聞いたのは萌のほうだった。我ながら珍しかった。いつもはそんなことを聞かない。

「読むのが怖くて、なかなか開けなくて」

彼は言った。

「怖い、ですか」

「読み終わったら何か終わる気がして」

それは萌にはわからない感覚だった。でもわからないまま、その言葉の重さを受け取った。

*

返却処理を終えた後、彼はすぐには行かなかった。

文学コーナーのほうへ歩いて行って、本棚の前に立った。いつもの、立ち読みの始まり。萌はカウンターから視線だけをやって、また手元の作業に戻った。

雨の音が続いている。

利用者はまばらで、子ども向けのコーナーで親子連れが絵本を広げている以外、静かなものだった。萌の同僚の田中さんは奥のバックヤードで作業中で、カウンターにいるのは萌だけだ。

三十分ほどして、彼が本を四冊抱えてカウンターに戻ってきた。

「借ります」

「はい」

萌は貸出処理を始めた。バーコードを読み取りながら、表紙を確認する。レーモン・クノー、ジュリアン・グラック、フィリップ・ソレルス、それからもう一冊。

後藤明生、『挟み撃ち』。

萌の手が一瞬、止まった。

「これ、読んだことがありますか」

彼が言った。

聞かれたのだとわかるまでに少し間があった。自分に向けられた言葉だと気づいて、萌は顔を上げた。

「後藤明生は」彼が続ける、「今はあんまり読まれていないけど、ずっと面白い」

「名前は知っています」萌は正直に答えた、「でも読んだことはなくて」

「そうですか」

それだけで彼は話を止めなかった。

「一九七〇年代の小説なんです、主人公が延々と歩いていて、でも何も起きなくて、それがとても良いんです。何も起きないことが、豊かに見えてくる」

萌はバーコードリーダーを持ったまま聞いていた。

本の話をするとき、彼の声は少しだけ変わる。低さは変わらないけれど、どこかほどこけたような感じになる。選ぶ言葉の輪郭が、少しだけはつきりする。

「何も起きないのに、豊か」

「そうです。停滞が、豊かさになる。そういう小説があるんです」

萌はうなずいた。何かを返したかったけれど、言葉が見つからなかった。それでもうなずいた、というそのことを、彼は受け取ってくれたようだった。

「ここに後藤明生、何冊ありますか」

「少し前に整理したんですが、確か三冊か四冊あったと思います」萌は立ち上がった、「確認してみましようか」

*

文学コーナーの「こ」の棚へ歩きながら、萌は自分が案内していることをどこかで意識していた。当たり前なことだ。司書の仕事だ。でも今日は、それがすこし、違う感じがした。

棚を指で辿る。吉田修一、古井由吉、後藤明生。三冊あった。萌は背表紙を確認して、

「三冊ありますね。『行き帰り』と『首塚の上のアドバルーン』と、それから詩集が一冊」

「『行き帰り』が一番好きです」

彼は言った。隣に来て、棚を見ている。距離が近い。でも過剰ではない。本棚の前でそうなってしまう距離感、というものがあつて、ここでは自然なことだと萌は思った。

「借りていかれますか」

「今日はこれで十分です」

彼は抱えていた四冊を少し持ち直した。萌は棚の前から半歩引いた。

「後藤明生は」彼が言う、「亡くなつてから評価されたタイプで、生きてるときはあまり売れなかったみたいですよ」

「そういう人、多いですよね」

「多いです。本に限らず」

短い沈黙が落ちた。雨の音が戻ってくる。

棚と棚の間の、狭い通路。外の光が弱くて、照明がほんの少し橙色に見えた。

「司書さんは」彼が言った、「どんな本が好きですか」

聞かれるとは思っていなかった。

三秒くらい、何も言えなかった。

「川上弘美が好きです」萌はやつと言った、「あと、梨木香歩。日常の中に、別の時間が入り込んでくるよな」

彼はうなずいた。何かを考えるように、少し間を置いて。

「わかります。別の時間の話ですね」

その言い方が、なぜかすとんと萌の中に入ってきた。別の時間の話。そうだ、自分が好きなのはそういう話なのかもしれない。自分では言語化できていなかったことを、たつた今言葉にされた気がした。

胸の奥が、かすかに動いた。

*

カウンターに戻って貸出処理の続きをする。彼は本を受け取りながら、鞆に入れた。

大きめの布製のトートバッグ。本を入れるために作られたような深さだった。

「雨、強いですね」

彼が言った。何気なく。でも帰り際に、天気の話をするのは初めてだった。

「そうですね」萌は答えた、「今日は一日降るみたいで」

「帰りが大変です」

「傘、持ってきてよかったですね」

それだけの会話だった。でも萌は、その会話のやわらかさを感じていた。本の話でも、手続きの話でもない、ただの天気の話。

彼はトートバッグを肩にかけて、軽く会釈をした。

「また来ます」

――

■ 体験版はここまでです。

この続き――閉架書庫での二人きり、喫茶店での誘い、そして閉館後の図書館で交わす約束。